

日本川崎病研究センターニュースレター

(No.3) 2002.1.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

序 理事長 川崎富作

新年おめでとうございます。

昨年9月11日の同時多発テロに端を発して、10月からの米軍のアフガニスタン攻撃、タリバン政権の崩壊と目まぐるしい国際情勢の変化を経験した2001年の後半でした。

一方、目を国内に転じると、聖域なき構造改革のスローガンをかかげた小泉政権は、今までの自民党内閣とは一味違った官僚の操り人形でない印象を国民に与えて80%近い高支持率を保ちつづけています。バブル崩壊後10年も経ち、この間、政府は多額の公的資金を銀行に投入したにも拘らず不良債権問題は少しも改善されず、今日の経済危機の最大の原因となっています。これは歴代の銀行の頭取達が不良債権の実態を隠蔽し、赤字決算を恐れて次々と先送りし、多額の報酬と退職金を平然と受け取って来た無責任者の集団であったからです。国民は小泉内閣が銀行の不良債権問題を速やかに処理して、一日も早く経済再建を達成して欲しいと願うからでしょう。また、特殊法人という官僚の特権の上にあぐらをかいた金食い虫を早く合理的に処理して欲しいと小泉政権に期待しているからの高支持率と思います。今年こそ目に見えるような改革を実行して欲しいものです。

川崎病研究では、12月には第7回川崎病国際シンポジウム(直江史郎会長)が箱根で開かれ、内外の多数の参加者により、川崎病研究の成果が報告され、病因解明に向けても歩み一歩挑戦し

ている感を深くしました。

1999年9月から当センターはNPO法人として病因の解明と長期予後の追跡を2大柱に、色々な研究チームと連携して種々なるプロジェクトを推進してきて2年半になりました。

特に川崎病の原因を一刻も早く解明する事はわれわれの長年に亘る悲願であります。この目的で山口大学小児科の古川教授のグループと岡山大学免疫学の中山教授のグループが3年前から共同研究チームを結成して、癌抗原を同定する新しい方法(SEREX法)を川崎病に応用して川崎病の原因となる抗原ペプチドを証明しようとの研究が精力的に着々と進められています。しかし、ほぼ3年が経ちましたので、千葉大免疫学の谷口克教授に第三者の立場から今までの病因研究を検討していただいたところ、川崎病の原因追求には現時点で考えられる最もよい方法であろうとのお墨付きを頂きました。今後とも皆さんと共に古川・中山共同研究チームをサポートしていきたいと考えますのでよろしくお願い申し上げます。

本号では千葉大学免疫学の谷口克教授の玉稿と、第7回国際川崎病シンポジウム報告を直江理事に寄稿していただきました。ご感想をお寄せください。

ニュースレターNo.3をお届けいたします。

ご意見ご感想をお寄せください。

門外漢の独り言

谷口 克

平成 13 年 1 月 9 日、川崎富作先生に招かれて日本川崎病研究センター理事会に出席いたしました。何とんでも川崎病の原因を究明したいという川崎先生の強い意志がご出席の先生方に伝わり、理事の方々には多少お年を召されてはおられても、実に若々しい意気込みと情熱を感じ、私自身も多いに啓発されました。川崎病研究センターでは、原因究明のために研究助成事業をされていますが、その事業、すなわち川崎病研究に対して、免疫学者としてどのように考えるかと言うことでした。とくに古川先生の SEREX 法を用いた研究と小池先生の溶連菌感染と T リンパ球の反応性の研究についての意見を聞かれました。

SEREX 法は患者血清中にある抗体がどのような細菌・ウイルス・カビなどの病原体に対して作られているかを調べる最近開発された方法です。患者がどのような菌に感染したかを網羅的に調べる方法としては優れていて、抗体と反応する物質、病原体側のアミノ酸配列が分かる仕組みになっているので、容易に判定できます。この方法で、がん抗原を特定する試みもなされていますが、原因不明の感染症に続いて発病が考えられる川崎病の原因追求には優れている方法だと思います。ただ、この方法で検出される様々な抗原はあくまでも川崎病の起因物質の候補であって、特定するためにはさらなる研究が必要です。たとえば、抗体を複数の急性期の患者さんから集めて実験することも必要です。川崎病の特徴である血管炎と感染が関係あるとすれば患者抗体の中から血管と反応する抗体だけを特定し、それを用いて SEREX 法を行うことが近道かも知れません。

溶連菌感染と川崎病発症に関する研究に関し

ては、川崎病を起すリンパ球に T 細胞が関与していると想定した場合に意味のあるものとなります。溶連菌成分と反応する T リンパ球受容体の種類を調べることで、どんな抗原が免疫反応に関与しているかを知ることができるからです。小池先生のグループは溶連菌毒素の SPE-C とする成分に反応する受容体を持つ T リンパ球が、多くの患者で増殖し、同年代の非川崎病児では見られないことから、溶連菌毒素 SPE-C が一つの原因ではないかとお考えになっていらっしゃると思います。研究結果は明らかに川崎病発症と溶連菌感染の相関を強く示唆します。血管炎発症との関係や溶連菌感染の証明が今後重要になると思います。これら二つの別々の切り口の研究成果が、融合したときに、原因が同定できるかも知れません。

自己免疫疾患の多くは、その原因が特定されていません。細菌感染に続いて発症するケースもまま報告されています。実験的にも証明されている例では、細菌成分と我々の体の成分と共通抗原性があり、その細菌成分に対する免疫反応を起した結果、免疫系が自分を攻撃し自己免疫病が発症する例です。代表的な例はハギランバレー症候群と言う末梢神経の病気で細菌成分の糖脂質に対する抗体が、神経繊維の構成成分と反応して病気を起こす例です。これと似たことは血管炎を伴う膠原病でも動物実験で証明されている例がありますので、川崎病も自己免疫疾患の範疇に入るのかも知れません。いま一度血管炎の成り立ち、血管炎を起す原因物質（抗体、T 細胞、細菌、ウイルス、カビなど）を特定することが重要かも知れません。（千葉大学大学院医学研究院免疫発生学教授）

第7回国際川崎病シンポジウム報告

理事 直江史郎

参加した先生方を乗せたバスを見送り“やっと終わった”。約3年前にハワイ島で第7回国際川崎病シンポジウムを引き受けたが、解らぬ事が多く、川崎先生や第5回目を担当した久留米大学の加藤・赤木両先生に教えを受けつつ準備した。事務局長の菌部先生、財務委員長の佐地先生、そして私どもの高橋君の3人はフル回転であった。特に、高橋君はこの一年忙しい思いをさせてしまった。

かなりの高水準の演題があり、討論が活発で、会本来の目的をほぼ満たすことが出来たと思う。また、成功の原因は笑顔であらゆる下働きを受け持ってくれた30名以上の「川崎病の子供を持つ親の会」会員によるボランティアのお陰であった。これは、内外を問わず参加した先生方の誰もが認めていた。また、第一日目に“患児を持つ親”と“患児”自身の発言、米国の「親の会」の代表や、ロスの高橋先生の持参「親達との座談会」のビデオを加えてセッションを作った。当初、「親の会」や「患児」の参加に反対の声も無いではなかった。しかし、このセッションが終わったあとに外国の先生が“胸が詰まった”と涙を流していたのを見て、このセッションを作り間違いではなかったことを確信した。

開会式には東邦大学の青木継稔学長の祝辞を頂いたが、その前に佐地先生の企画によるNHKテレビ番組「ER」の川崎病の部分を実約2分ほど流したことでリラックス出来、評判が良かった。これで、参加者もシンポジウムの雰囲気に入り込んだのか、ウェルカムパーティーでも互いに再会を喜び、早くも熱心な議論があちこちで行われていた。

箱根に来て富士山も見せないで帰す訳にはいかないと思い、3時間ほどなげなしの資金を工



面し4台のバスを仕立て、大涌谷と箱根神社に行ったが、日本の先生も箱根に来たことのない方が割合多かったので、一寸した息抜き

になった様である。夕方から議論再開。夜は、軽い食事とビール・ワインを飲みながら死亡例の検討会を行った。γ-グロブリン不応例に対する考えを討論する事が目的であった。議論が白熱し一応の目的が果たせた。議論沸騰が原因か用意したアルコールが意外に減らなかった。

ポスターセッションも、多少趣向を変えポスター発表だけの演題と、ポスターで発表したものを数分間口頭で要旨を述べ、討論するという2重の方法を採った。また、今回初めて voting system を採用したが、それなりの効果が有ったと思う。

3日目のパーティーに先立ち、大分から都真由香ちゃんの飛び入りのピアノ演奏があり、ボランティアによる箱根太鼓を楽しみ、なかなか会が終わらないほど盛会であった。

さて、今回のシンポジウムは川崎病研究センターからの多大な資金援助があつてこそ開催出来た。準備金を確保できて非常に動きやすく、この援助がシンポジウムを成功させたと言っても過言ではない。今回も原因究明に至らず残念であったが、すぐそばまで来ているが、もう一押しが足りない感が残った。次回を期待したい。

(東邦大学医学部附属大橋病院病理学講座)

事務局から

【センター日報】平成13年8月～

平成13年10月9日 平成13年度第2回理事会開催

平成14年1月25日、3月15日 平成13年度理事会開催予定

平成14年5月31日 平成14年度第1回理事会開催予定

平成14年6月8日 平成14年度総会と研究報告会および懇親会（於：東京 YWCA 予定）

各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。

【今後の研究会の予定】

★ 第26回近畿川崎病研究会 平成14年3月2日（於：テイジンホール・大阪市）

会長：松村正彦（天理よろず相談所病院小児科部長）

★ 第22回東海川崎病研究会 平成14年6月8日（於：愛知県医師会館）

当番世話人：三谷義英（三重大学医学部小児科）

★ 第3回北海道川崎病研究会 平成14年6月22日（於：札幌市）

代表世話人：濱田勇（手稲溪仁会病院小児科部長）

★ 第10回東京川崎病連絡会 平成14年6月22日（於：日赤医療センター2階講堂）

代表世話人：菌部友良（日赤医療センター小児科部長）

★ 第22回日本川崎病研究会 平成14年9月27-28日（於：北九州国際会議場）

会長：白幡聡（産業医科大学小児科教授）

★ 「川崎病の子供を持つ親の会」全国講演（および医療相談会）キャラバン

問い合わせ先：「川崎病の子供を持つ親の会」事務局 Tel:044-977-8451

【当センターは特定非営利活動法人で会員制です】

新会員をご紹介ください!!!

正会員 年会費 20,000円

賛助会員 年会費 5,000円

【川崎病に関するご相談】

当センターでは、川崎富作理事長が川崎病に関するご相談を受けております（無料）。お電話お手紙、Fax等でご相談をお寄せください。（月曜日～金曜日：午前10時～午後4時）

特定非営利活動法人日本川崎病研究センター

〒101-041 東京都千代田区神田須田町1-1-1 久保キクビル6階

Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-1124

日本川崎病研究センターニュースレター

(No.1) 2001.1.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター